

世界の視点をめぐる思想史的研究

研究代表者 栗原 隆

参加教員

栗原 隆
井山 弘幸
城戸 淳
宮崎 裕助
青柳 かおる
太田 紘史

『知のトポス』に収斂する研究

『知のトポス』Nr.10を、年度末に刊行、1年間の研究も自ずとそれに向けて収斂することになった。未邦訳の重要なテキストを翻訳・紹介することを旨とする『知のトポス』の、2014年度の内容を記す。

- ・ G・W・F・ヘーゲル「主観的精神の哲学のための断章」(栗原 隆・高畑菜子 訳, 1~48頁)
- ・ G・W・F・ヘーゲル「『精神の哲学』についての講義(ベルリン1827年/28年冬学期)」(栗原隆 監訳, 49~101頁)
- ・ マルティン・ハイデッガー「ニーチェのツァラトゥストラとは誰なのか?」(田中純夫 訳, 103~142頁)
- ・ ゲルハルト・クリューガー「カントの批判における哲学と道徳(1)」(宮村悠介 訳, 143~213頁)
- ・ ジェラルド・グラネル「ジャック・デリダと起源の抹消」(宮崎裕助・松田智裕 訳, 215~253頁)
- ・ パウル・ツイヒェ「シェリングの『事実の感情』——心理学と根元哲学との

間の新たな能力 ——」(栗原隆 訳, 255~280頁)

総括

『知のトポス』Nr.10の内容を見れば一目瞭然、栗原にあってはヘーゲルの『精神哲学』を中心として研究が展開されたような一年であった。7月には、栗原隆「ファンタジーの射程とムネモシュネーの深み —— 夜と泉をめぐる ——」が、『シェリング年報』(日本シェリング協会, 22号, 59~71頁)に掲載された。10月には、栗原隆「心の深处と知性の豎坑 —— ヘーゲル『精神哲学』の改訂を視野に入れ ——」を、『思索』(東北大学哲学研究会, 第47号, 117~134頁)に寄稿した。さらに、加藤尚武教授の喜寿を寿ぐとともに、11年間にわたって展開してきた大型科研費による共同研究の集大成として、2015年3月に東北大学出版会から、『生の倫理と世界の論理』を座小田豊教授と共同で編集・刊行するとともに、栗原隆『『生』の淵源とその脈路 —— 青年ヘーゲルにおける『生』の弁証法の源泉 ——」を取めた。

これらはいずれも、ヘーゲルにおける『精神哲学』の基底を、青年期の生の思想に見定めようとした試みである。これによって、ヘーゲルにおける「生」の思想を、神秘化することなく、文献的に跡付ける試みであった。これらの研究を通して、ヘーゲルの『精神哲学』の基底に、自然哲学が位置づけられるとともに、人間の本性の豊かな営みが、精神の働きを支えていることが確認された。こうした把握を国際的な研究交流の場で発信するべく、「心の深处と知性の豎坑 —— ヘーゲル『精神哲学』の改訂を視野に入れ ——」を独訳, „Tiefer der Seele und Schacht der Intelligenz —— Mit Rücksicht auf Hegels Revision der „Philosophie des Geistes“として、9月27日(土)ならびに11月26日(水)に「ときめいと」で開催された、2つの国際シンポジウムで口頭発表した。なお、学会発表としては、5月31日(土)13時30分から、東京藝術大学で開催された「美学会」東部会例会で、栗原隆「物語の内化と心の表出 —— ドレスデン探訪に寄せて、ヘーゲルにおける絵画論の成立を考える」を口頭発表している。

研究会活動

人文学部プロジェクトと輻輳する形で展開された研究会活動を以下に記す。

9月19日（金）研究会（新潟大学総合教育研究棟「プレゼンルーム」）

17時00分～19時00分

（大阪大学大学院准教授）田中均「芸術の美学的体制とロマン主義美学」

9月27日（土）国際シンポジウム

„Philosophie des Geistes und Psychologie um 1800“（新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」）

12時15分～12時35分

田中 純夫「ハイデッガーとエリウゲナ」

シンポジウム

12時45分～13時35分

（東京大学大学院）山口沙絵子「Die Unverständlichkeit der philosophischen Texte bei F. Schlegel, Fichte, und Kant」

13時45分～14時45分

（新潟大学）栗原隆「Tiefe der Seele und Schacht der Intelligenz — Mit Rücksicht auf Hegels Revision der „Philosophie des Geistes」

14時50分～15時50分

（九州大学教授）武田利勝「Wie kann die Schönheit beschrieben werden? — K. Ph. Moritz und Lavater vor dem Apollo im Belvedere」

16時00分～18時30分

（ユトレヒト大学教授）Professor Paul Ziche「Neue Vermögen des Geistes — Empirische und psychologische Studien zu den menschlichen Erkenntnisvermögen im 1800」

9月28日（日）

10時30分～11時30分

(東北大学教授) 尾崎彰宏 「カーレル・ファン・マンデル 『北方画家列伝』
について」

11時40分～13時10分

(京都大学名誉教授) 岩城見一 「ボアスレ兄弟について」

11月26日 (水) 国際シンポジウム

„Heidegger, or the Task of Theoria and Translation“ (新潟大学駅南キャンパス
「ときめいと」)

13時00分～14時00分

Takashi KURIHARA (Niigata Universität) 「Tiefe der Seele und Schacht der
Intelligenz — Mit Rücksicht auf Hegels Revision der „Philosophie des
Geistes」 (栗原 隆 (新潟大学) 「心の深处と知性の豎坑 —— ヘーゲル 『精
神哲学』の改訂を視野に入れて」)

14時00分～15時00分

Tatsuya Nishiyama (Seinan Gakuin University) 「La tâche du traducteur dans le
temps des conceptions de monde (Heidegger)」 (西山達也 (西南学院大学
准教授) 「世界像の時代における翻訳者の課題 (ハイデガー)」)

15時00分～16時30分 基調講演

Rodolphe Gasché (SUNY at Buffalo) 「Watching over What is Still to Come」
(ロドルフ・ガシェ (ニューヨーク州立大学バッファロー校教授) 「いまだ
来たるべきものを見張ること」)

16時45分～18時00分

共同討議

12月18日 (木) ヘーゲル・アーベント (新潟大学総合教育研究棟「人間学P S」)

18時00分～19時30分

栗原 隆 「『生』の淵源とその脈路 —— 青年ヘーゲルにおける『生』の弁
証法の源泉」

加えて、2015年2月には、人文ブックレットとして、『昔話から読み解く人間学——人生の難局を乗り越えるために——』（新潟大学人文学部、全53頁）も上梓されている。

Google Books によって、新たな研究領域が拓かれたことに伴い、研究地平が細密画のように、格段に精度が上がったことで、活発に研究を展開することができた。また、研究会を開催する際には、決して貸館営業になることなく、主体的な力量を高める機会にしようと、心がけている。

2015年9月9日

（文責：栗原 隆）

〈声〉とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

1. プロジェクト概略

本プロジェクトの目的は、〈声〉の文化が、これまでの歴史の中で、テキストの文字言語との闘ぎ合いから始まり、制度的なさまざまな制約と葛藤、軋轢を繰り返してきたことを確認するとともに、文学・思想・メディア文化が〈声〉の根源的な力、豊饒な力をいかに再生させるために工夫してきたか、その諸相を例示し、さらに〈声〉から、いかに新しい発想と表現可能性を得てきたかを、具体的に明らかにすることである。そこに新たな人文科学研究の可能性がある。

当面は、〈声〉と制度の様々な関係を、歴史的かつ領域横断的に検討するために、各国文学（日本文学、中国文学、朝鮮文学、イギリス文学、フランス文学、ロシア文学、アメリカ文学）、映像論、啓蒙思想などを専門とする研究者をメンバーとし、さらに、従来からのボルドー第3大学の研究グループ（「モデルニテ」）と連携し、国内の他大学の研究者（とりわけ、人文学部と交流協定を締結